

人生ハンド仏句

第145号

H. 26. 4. 1

(毎月1日発行)

一人だけの卒業式

住職 谷川寛俊

四月は入学式、新入社員、年度初め等々、いつもの月より何かしら新鮮味を感じる月ではないでしょうか？特に小学一年生はピカピカの制服にランドセル、毎年のことながら、ランドセルが歩いていくような、微笑ましい光景をいつも拝見しながらひそかに、大きく成長して欲しい、そして心優しい期待される立派な人間に育って欲しいと心の中で願わずにはおられません。

毎年ある有名企業の広報部から「ふれあいトーク集」という本が出ていますが、その中から特に優れた心温まる記事が出ていたので、ご紹介したいと思います。

小松まり子(仮名)さんという方の文章が載っていました。

小松さんのお子さん卓也君は足が不自由で、小学校六年間車椅子で通っていました。その車椅子を押していたのが、近所の友達でした。ところが中学に上がる時、教育委員会から、「お宅のお子さんは身体が不自由だから設備の整った中学校に行ってほしい。」と指示がきたそうです。ご両親は納得したのですが、友達が納得しませんでした。六年間一緒に通ったんだから、中学校三年間も同じ学校へ行こうと署名活動まで始めました。

「エレベーターがないんだったら、トイレに行きたかったら、僕らがその車椅子を担いででもやります。一緒の学校に通わせて下さい。」

願いが叶って三年間一緒の中学校に通うことが出来ました。

ところが中学の卒業式の日、卓也君は風邪を引いて、式に出席出来なかったそうです。その時卓也君は、「お母さん、僕をベランダに出してほし

「人生ハンド仏句」

と打ち込んで頂けば、ホームページにつながります。

編集・発行
玉蓮山 真成 寺
編集部 谷川久仁子
TEL・FAX 0765-22-2268

い。友達が迎えに来た時に、小学校と中学校の九ヶ年間車椅子を押してくれたお礼が言いたい。」そして迎えに来た友達に、ベランダから「九年間有り難う」と叫びました。

それに対して友達は、「じゃあ、卓也の分も今日は卒業証書もらって来るよ。」と言って学校へ行つたそうです。

卒業式が終わった頃、小松さん宅のチャイムが鳴りました。

そこには校長先生や各学年の担任をされた先生方、九年間一緒に学校に通った友達が立っていました。そして校長先生が「卓也君のお部屋で卒業式をやらせて下さい。お願いします」と言われ、校長先生は、たった一人の生徒の為に卒業証書を読み、そして各学年の担任の先生方から「良く頑張ったネ」と握手をしてくれました。友達は、周りを囲んで握手をしながら元気よく校歌を歌いました。

卓也君は、車椅子に座ったまま下に向けて泣くばかりです。

母親も、目から大粒の涙を流しながら、先生方やお友達の手を握りしめ「卓也が小学校・中学校を通じて、人の優しさほど人間を豊かにしてくれるものは、ないという事をきつと学んでくれたと思います。母親としてそれだけで、もう十分です。」と結んでありました。

いじめや虐待が毎日のように起こっている現代社会にあつて、ほんとうに大切なことを、学んだような気がしました。



